

複式学級授業の指導案の分析

塚野弘明*・八巻恒雄*・小沢一昭**・舞田一穂***・和田英****・三浦建成*****

(2002年3月20日受理)

Tsuneo YAMAKI, Hiroaki TSUKANO, Kazuaki OZAWA, Kazuho MAITA, Masaru WADA, Kensei MIURA

The Analysis of Lesson Plans for the Combined Class in Iwate Prefecture

1. 研究の目的と今年度の研究の概要

教育実践総合センターの小規模学校・複式学級指導のカリキュラム開発プロジェクトでは、「小規模学校・複式学級指導のカリキュラムを研究・開発し、資料として集積して、県内小・中学校の運営や指導の改善に資する。」ことを目的にし研究をスタートした。研究は3年計画であり、初年度に当たる13年度は、県内の小学校の複式学級授業の指導案を集め、分析し、県内の複式授業の実態を明らかにすることとした。

岩手県へき地・小規模学校教育研究連盟と共同して指導案を集めたところ、県内の複式学級を有する学校124校中66校より、合計147の指導案を集めることができた。

本研究報告では、その指導案を分析して、実態として明らかになったことを以下にまとめる。

2. 指導案分析の観点

集めた指導案を、次のような4つの観点から分析することとした。

- (1) 教科ごとに分類し、その傾向を捉える。
- (2) 指導案の形式や特徴を調べる。
- (3) 直接指導と間接指導の内容を調べる。
- (4) 変則複式学級における指導の実態を捉える。

*岩手大学教育学部附属教育実践総合センター

**盛岡市立浅岸小学校

***安代町立細野小学校

****葛巻町立江刈小学校

*****岩手大学教育学部附属小学校

3. 分析の結果

(1) 教科ごとの傾向

147の指導案の教科，学年ごとの数をまとめたのが，表1である。

表1 複式学級指導案の教科別分類

	1・2年	2・3年	3・4年	4・5年	5・6年	3・5年	1・3年	2・4年	1~6年	合計	割合	変則の割合	国算の割合
国語	13	5	14	3	20	1				56	38%		
社会				1						1	1%	23	112
算数	10	6	20	3	17					56	38%	16%	76%
理科				1	1					2	1%		
音楽	1									1	1%		
図工										0	0%		
家庭										0	0%		
体育			1							1	1%		
生活	9									9	6%		
総合			10	1	7				1	19	13%		
道徳							1	1		2	1%		
合計	33	11	45	9	45	1	1	1	1	147			

この表から分かるように，国語と算数の指導案の数が際立って多く，その数は全体の76%を占める。集めた指導案は，校内研究の研究授業，または公開研究会の指導案がほとんどであるということを考えれば，複式学級を有する学校では，国語・算数を研究対象としている学校が多いということが分かる。これは，国語・算数の複式授業についての研究は比較的さかに行われているが，他の教科・領域の授業研究はあまり行われていないということを示す。国語・算数を基礎・基本的教科として各校では重要視していること，また，国語・算数以外の教科では，教科の特質や各学校の事情等により複式形態を取りにくいということが，このような偏りの原因になっているのではないかと考える。

次に多かったのが，総合的な学習の時間の19，生活科の9であるが，内容を見ると複式形態で行われているものはなく，総合・生活科の複式授業についても，研究を深めていく必要があると考える。

(2) 指導案の形式・特徴

次に，数が多かった国語と算数の指導案に絞って，指導案の形式や特徴を分析した。指導案の全体の項目は，ほぼ単学級のものと同様に，典型的な例を挙げると，次のようになる。

表2 複式学級指導案の典型例

1. 単元名 2. 教材名 3. 単元について ・主たる指導事項 ・児童の実態 ・教材について ・指導に当たって 4. 単元の目標 5. 指導計画 6. 本時の指導 (1) 目標 (2) 展開

この項目の中で、複式授業の指導案として特徴が出るのは、「6 本時の指導」の「(2) 展開」の部分で、いくつか例を挙げると、次のようになる(表3)。

表3 複式学級指導案の形式的特徴

和井内小 1・2年 読む

1 年 生				2 年 生			
支 援	学 習 活 動	段 階	形 態	形 態	段 階	学 習 活 動	支 援
			直・全	直・全			
			直・全	直・全			

亀ヶ森小 4・5年 聞く

4 年 生				5 年 生			
指導上の留意点	学習活動及び内容	段階	渡り	段階	学習活動及び内容	指導上の留意点	

笹渡小 5・6年 四角形と三角形

段階	指導の留意点と支援※評価	学習内容と活動	形態	学習内容と活動	指導の留意点と支援※評価	段階

中央に直接・間接指導、わたり等の指導形態が示され、その両側に学年ごとの学習活動、支援、指導上の留意点、評価等の内容が示されている。学習の段階については、中央に示されているものと両側に示されているものがり、両者を見比べてみたところ、両側に示したもののの方が見やすいようであった。

この他に、複式授業の指導案として特徴的な例として、「3 単元について」の「児童の実態」の部分において「個々の実態」(表4)を示したり、「個別の支援計画」(表5)を示したりしている工夫が見られた。

表4 複式指導案の工夫例「個々の実態」

冬部小 5・6年 読む

<p>児童観 これまでの説明文の学習で、形式段落ごとの要点や問題提示文に対する答えを読み取る学習をしてきている。これらの学習を通して、段落相互の関係や内容の中心をとらえる力が育ってきている。</p> <p style="text-align: center;">個々の実態</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>R・T</th> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> 基本的な学習態度が身についている。 自分なりの言葉で考えを発表することができる。 </td> </tr> </table>	R・T	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な学習態度が身についている。 自分なりの言葉で考えを発表することができる。 	<p>児童観 これまでの説明文の学習で、意味段落ごとの要点や文章構成をとらえる学習をしてきた。しかし、着目する語句や段落相互の関係から、自力で要旨をまとめる力が十分に身につけているとは言えない。</p> <p style="text-align: center;">個々の実態</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>H・S</th> <th>H・H</th> <th>M・O</th> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> 意欲的な学習態度だが、気分にもらがある。 語威力があり、発問に対する反応が早い。 </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 理解が早く、分からないことを最後まで追及しようとする。 発問に対して自分なりの考えを発表することができる。 </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 基本的な学習態度が身についている。 読み取りに時間を要するが、理解した内容を発表することができる。 </td> </tr> </table>	H・S	H・H	M・O	<ul style="list-style-type: none"> 意欲的な学習態度だが、気分にもらがある。 語威力があり、発問に対する反応が早い。 	<ul style="list-style-type: none"> 理解が早く、分からないことを最後まで追及しようとする。 発問に対して自分なりの考えを発表することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な学習態度が身についている。 読み取りに時間を要するが、理解した内容を発表することができる。
R・T									
<ul style="list-style-type: none"> 基本的な学習態度が身についている。 自分なりの言葉で考えを発表することができる。 									
H・S	H・H	M・O							
<ul style="list-style-type: none"> 意欲的な学習態度だが、気分にもらがある。 語威力があり、発問に対する反応が早い。 	<ul style="list-style-type: none"> 理解が早く、分からないことを最後まで追及しようとする。 発問に対して自分なりの考えを発表することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な学習態度が身についている。 読み取りに時間を要するが、理解した内容を発表することができる。 							

表5 複式学級指導案の工夫例 | 個別の支援計画

麦生小 5・6年 読む

	6年			5年			
	K・K	K・H	Y・H	A・M	H・H	M・N	S・H
意識調査・日常の実態	①嫌い ②嫌い ③全然楽しみでない *国語に対する好感度はかなり低い、自分から努力してがんばろうという気持ちを持っている。知的関心はクラスの中では高い。	①嫌い ②あまり好きでない ③あまり楽しみでない *国語の学習をめんどろくさがる傾向がある。イメージをふくらませて読んだりすることを苦手としているが、しっかり人の話を聞くことができる。	①好き ②大嫌い ③全然楽しみでない *説明文の学習に比して、物語文の学習では、独創的な見方をし、イメージが比較的豊かである。漢字の学習も好んでやる。	①好き ②嫌い ③あまり楽しみでない *自分の考えを書いたり、表現したりすることを苦手としているが、変わった角度から読み取りができる。	①好き ②好き ③楽しみ *好んで読書をし、物語の登場人物の心情を深く読み取ることができる。自分の考えをしっかりと文章化できる。	①嫌い ②あまり好きでない ③楽しみ *物語などの読書を進んでする。どの教科でも発言は積極的であり、自分の考えをしっかりと文章化できる。	①嫌い ②好き ③あまり楽しみでない *文章で表現することを苦手としているが、物語の登場人物の心情を深く読み取ることができる。積極的に話し合いに参加する。
本単元での支援	・昨年度の学習では「言葉が難しく」よくわからなかったことからマイナスイメージが強いので「パンゲア」や「大陸移動説」について詳しく知りたいという願いを大切にしながら、挿絵や図と文章を丁寧につなぎ合わせながら、読み取りができるようにする。	・海岸線が重なり合うことやウエゲナーの調査に興味を持っているので、実際にパズルの重ね合わせやウエゲナーについての資料を提示したりすることで、教材に対する関心を集めていきたい。	・「地球」や「大地の動き」への関心も教材への関心もかなり希薄なので、少しでも教材を通して関心が高められるように視覚に訴えながら支援していきたい。また本人が期待している「音読」にも意図的に取り組ませたい。	・全体的に教材の内容に対する関心は低い、ウエゲナーに興味を持っているので、ウエゲナーについて詳しく調べさせたり、新聞づくりにかけるようにさせたい。	・自分で納得しながら学習を進めるタイプなので、この説明文の読み取りでも、叙述に即しながら、丁寧に読解を進めていくようにさせたい。読書を使っての言葉調べにも積極的なので、語句へも着目させていきたい。	・説明文は「意味がわからなくなる」ことが多いようなので、叙述や書かれてある順序をよく考えさせたい。説明を図や挿絵などに対応させながら読解を進めていくようにさせたい。	・文章表現が苦手でも、形象から深く考えることができるので、発言の機会を多くしながら、自分の考えを文章表現できるようにさせたい。ウエゲナーにも強く関心を持っているので、調べ学習にも挑戦させたい。

これらは、複式学級の少人数であることのプラス面を積極的に生かそうという工夫であると考えられる。この少人数のプラス面を生かしていけば、多人数の学級ではなかなか実現できない単元を通しての評価計画の設定や自己学習力（特に複式授業で必要とされる自己学習力）に関わる目標・評価項目の設定等が実現できるのではないかと考える。

(3) 直接・間接指導の内容

指導案の「本時の展開」から、直接指導・間接指導の内容を調べてみると、直接指導・間接指導のとり方について、一般的に言えるのは次のようなことである。

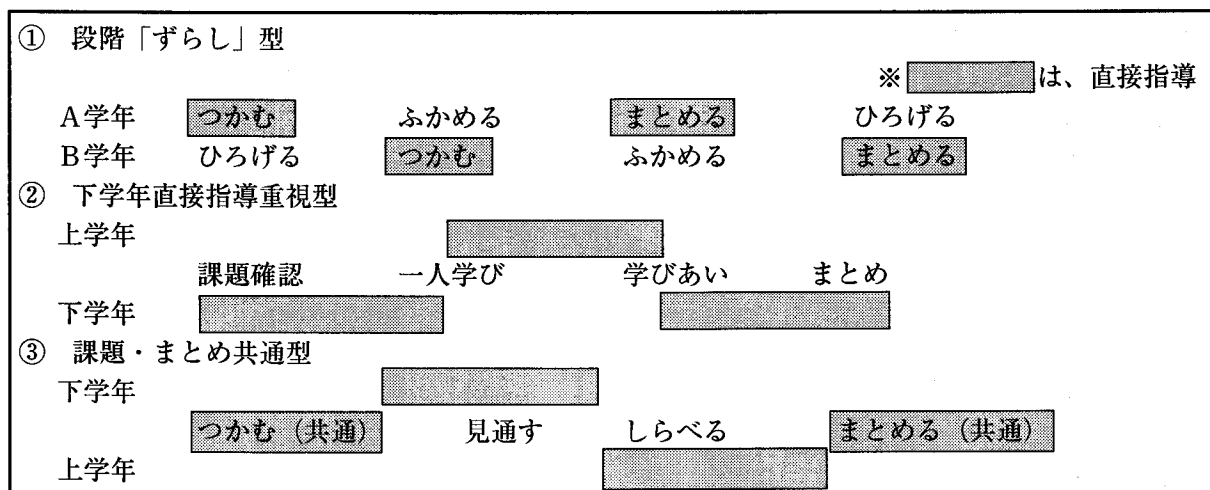
○ 1時間の授業の中に「一人学び」「学び合い」の活動を位置付け、「一人学び」は間接指導、「学

び合い」は直接指導とする。

- 課題把握、まとめの段階を直接指導とする。
- 下学年から直接指導に入る場合が多く、下学年の直接指導の役割を多くする場合が多い。
- 「わたり」は、平均2・3回の場合が多く、できるだけ少なくするという傾向にある。

直接指導・間接指導を効果的に行うために、1時間の各学年の指導の組み合わせ方を工夫する必要がある。指導案を分析した結果、組み合わせ方は、ほぼ次の3つの型に分類されることが分かった。

表6 直接指導・間接指導の組み合わせパターン



多くの学校では、①・②の型で指導しており、③の型は主に岩手大学教育学部附属小学校で行われている。

(4) 変則複式学級における指導の実態

表1を見ると、変則学級での指導案は2、3あり、これは全体の16%に当たる。組み合わせの学年も、2・3年、4・5年の他、3・5年、1・3年、2・4年等の学級もある。児童数の減少傾向を考えれば、変則複式学級の数も増え、学年の組み合わせのパターンもいろいろなケースが出てくることが予想される。

変則複式の場合には、A・B年度のカリキュラムを取ることはできず、どの教科においてもその学年の内容をその学年で指導しなければいけない。また、生活科や家庭科のように、一方の学年だけで学習する教科も出てくる。

このような問題を解決するためには、校内での指導体制や時間割等の工夫が必要とされる。また、より児童の発達段階にあった充実した指導を行うためには、人員加配等の措置も必要になってくるのではないと思われる。

4. 今後の研究について

今後、本プロジェクトでは、次のように研究を進めていく予定である。

- (1) 今回集めた指導案をデータベース化し、各校で資料として活用できるようにする。
- (2) 今年度の分析結果を参考にしながら、複式学級の授業のモデル案を作成し、その実践結果をまとめる。